慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	編集後記
Sub Title	
Author	徳永, 聡子(Tokunaga, Satoko)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.9/10, No.1 (2023. 3) ,p.171- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	合併号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000009-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

編集後記

徳永聡子
慶應義塾大学 DMC 研究センター副所長
文学部教授

今回の DMC 紀要は 9 号と 10 号の合併号でお届けいたします。

この二年間も新型コロナ・ウィルス感染症の影響のもと、さまざまなハードルを乗り越えながらの活動となりました。労苦はありながらも、いま自分たちに出来ることは何かを考え、工夫を重ねることで、歩みを止めることなく成果を積み上げることができたように思います。

2021 年から新しい企画として始まった DMC Talk は Vol. 5 までお届けしています。また 2022 年 3 月には、DMC Fireside Chat「大学教育のミライその 2：Hybrid & Flexible」をオンラインで開催しました。FutureLearn の Daniel Hope 氏の講演の後、Keio FutureLearn コースのリードエデュケーターたちとの対談が繰り広げられました。感染状況が落ち着いてきた 2022 年秋には、3 年ぶりに対面で DMC シンポジウムを開催することができました。テーマは「デジタルの本質とはなにか――メタバースに向かう中で考える」。Zoom でも同時配信を行うハイブリッド形式の開催により、多くの方に参加いただきました。

そして今号で特筆すべきは、DMC 初代所長を務められた松田隆美先生がこの 3 月末で定年を迎えられること、大川恵子所長がオンライン教育に関する長年の実績に対して義塾賞を授与されたことでしょう。DMC の活動の核である無料オンライン講座 FutureLearn は大川所長が立ち上げから牽引しています。その記念すべき 10 本目は、松田先生がリードエデュケーターとして制作にあたられた'Travelling Books: History in Europe and Japan' です。このコースは大英図書館と共同開発したもので、慶應義塾図書館の貴重書だけでなく、キリシタン版など大英図書館の至宝も用いたきわめ豪華な内容です。最初の構想は 2018 年にまで遡り、企画では大英図書館での撮影も予定していました。しかし人と人との接触や移動の制限が強いられたコロナ禍で、訪英の延期を何度も余儀なくされました。最終的には、三田旧図書館と大英図書館を遠隔接続するという新収録方法で、2022 年に英語版の公開へとこぎつけることができました。

現在、世界は大きな変化の渦中にあります。各地で不安定な情勢が続き、気候変動の問題も深刻化し、私たちの選択が、世界のひいては地球の未来を決めうる重大な局面がたくさんあります。

また ChatGPT に代表される AI の爆速的な発展は、学びの本質とは何か、私たちに再考を迫ります。DMC も来年 2014 年にはセンターとして 15 年目の節目を迎えます。センター設立時からの伝統を継承しつつ、次なる時代を見据えて歩みを進めてまいりたいと思います。